

看護職部門

コンビニ蛍

のぐち よしえ
【野口 由枝・熊本県】



入選

5年前、母が倒れてから私は、夜勤専従の看護師となった。私の勤める病院には社会的入院の患者も多い。

彼女は86歳、若いころは教壇に立ち、定年後も教育の場に身を置き、彼女いわく、「バリバリのキャリアウーマン」だったらしい。そんな肩書きからは想像もつかないほど、彼女の声は穏やかで、笑顔の可愛い、話好きのおばあちゃんに見えた。

私は当直に入る時、病室にあいさつまわりをする。「今日当直の野口です。よろしくお願いします」。すると彼女はいつもこう言う。「今日は何時ごろ暇になる？ じゃ、10時ごろ話に行ってもいいかしら」。私はひそかに真夜中の訪問者と呼んでいた。彼女は私が詰所にいなくても、歩行器を押し、消灯後のぼんやりと灯りのついた詰所入口の椅子に腰を掛け、私を待っていてくれた。それから彼女はゆっくりと話し出す。

「子どもさんは幾つになった？ そう、男の子？ 可愛いでしょ、私も何人もの子どもたちをみてきたけど男の子は優しいからいいわよ、頼りになるわよ」。

彼女は3人の息子を育てあげた母でもある。「そろそろ反抗期ね、そんな時は親も戸惑うから、ただ黙って抱きしめればいいの」が口癖で、彼女の声は、赤点ママの私に優しくかった。

それから、話し疲れた彼女は病室に戻っていく。彼女は消灯後の詰所の明かりをまるでコンビニのようだと笑っていた。「知ってる？ コンビニの明かりは蛍の明かりと同じ明るさなのよ、人がたくさん集まるようにね…」。

去年私は、乳がんを患い右の乳房をなくした。そして6カ月後、無事職場復帰した。「おかえり!」と言ってくれたなじみの患者さんの中に、彼女はいなかった。

今日も私は、夜勤専従として、彼女が言うコンビニ蛍をともしながら走り回っている。そして、ぼんやりと明かりのついた詰所の中、彼女との他愛のない時間を懐かしく思う。

「今、私の息子は中学2年生。あなたが教えてくれた反抗期です」